高齢診療科

●スタッフ（2019年10月1日現在）

診療科長　羽生　春夫
医局長　金髙　秀和
病棟医長　平尾　健太郎
外来医長　清水　聰一郎

医師数　常勤　15名
　　非常勤　4名

●診療科の特徴

超高齢化社会を迎える我が国において、国の基本的な方針としての健康寿命の延伸や活力ある長寿社会の構築が求められており、老年医学の位置づけはますます重要となっている。複数の疾患を併せ持ち、若年者とは生理学的にも大きな相違がみられる高齢者では、臓器別・領域別ではなく、より包括的または全人的な診療が求められており、高齢診療科は、「高齢者の疾患を診るのではなく、疾患を持つ高齢者を診る」ことを念頭に置きながら診療にあたっており、①75歳以上の高齢者を対象とした高齢者総合診療システムを導入、②身体面だけでなく、精神・心理面、生活機能面、社会・環境面からもアプローチする全人的医療の提供、③認知症（アルツハイマー病など）、神経変性疾患（パーキンソン病など）の高齢者神経疾患に対し、認知症専門医、神経内科専門医の診療、④低栄養・転倒・嚥下障害・フレイル・サルコペニアなどの老年症候群の包括的診療、⑤救命救急センター、脳神経外科、脳神経内科と協力し、脳卒中の超急性期ならびに急性期治療を積極的に行っている。

●診療体制と実績

1）外来診療体制と実績

地域医療機関との「認知症ケアネットワーク」を構築し、病診連携を積極的に推進し、診断後に紹介元への逆紹介により認知症治療の継続やケアを依頼、認知症症状に困った変化があれば随時再診してもらうなど、かかりつけ医との病診連携体制を確立している。現在では、外来初診の約70%以上が、地域医療機関からの紹介患者となっており、逆紹介率は100%を超えている。本年度の初診患者総数は1,164名であり、そのうち、もの忘れを主訴とする初診患者は644名であった（図1）。多くはアルツハイマー病であるが、その他の疾患も多い（図2）。身体所見、一般検査（血液検査、髄液検査、生理機能検査）、神経心理検査、画像検査結果を総合的に判断して、正確な診断・治療を行っている。

これまで推進してきた地域連携、診療実績が評価されて、平成27年9月に東京都より当院は「認知症疾患医療センター」に指定された。羽生主任教授がセンター長を兼任し、東京都区西部二次保健医療圏における地域連携型センターとして認知症の早期診断と対応に貢献している。

また、毎月介護者教室や認知症カフェを開催して、患者のうつ予防や介護者の負担感軽減に向けた取り組みを行っている。

さらに、脳卒中センターの一員として、救命救急センター、脳神経外科、脳神経内科と連携し、あらゆるタイプの脳卒中急性期治療にあたっている。認知症・神経疾患以外でも、75歳以上高齢者の多種多様な疾患を幅広く診ている。

2）入院診療体制と実績

高齢者の診療は、身体面だけではなく、精神心理面、生活機能面からも総合的な評価が必要となることから、高齢者総合機能評価ツールを用いて、院内の高齢患者の機能評価のスクリーニングを行っている。

本年度の延べ入院患者数は473名であった。図3に入院となった原因疾患の割合を示す。入院の原因となる疾患は、多岐にわたるため、全人的な質の高い診療を提供するよう努めている。他科に入院した患者に対しても、よりよいケアのために多職種による認知症ケアチームによる回診を行い、患者の認知機能維持や不要な身体拘束を防ぎ、さらにADLやモチベーション維持のために、院内デイサービスも行っている。

図1：外来初診患者の疾患別割合

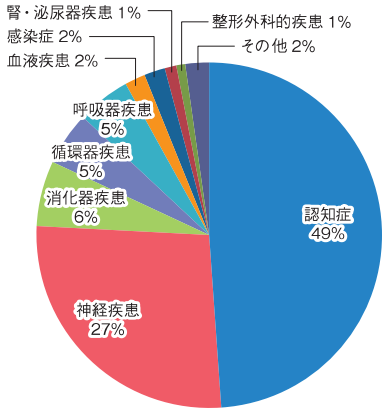

図2：“もの忘れ”の内訳

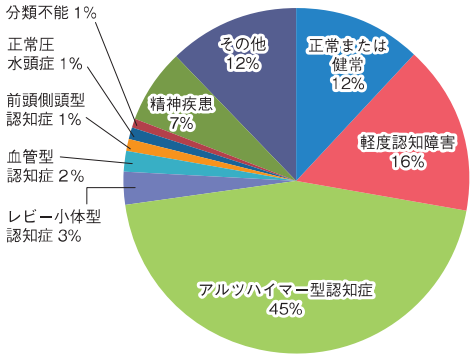
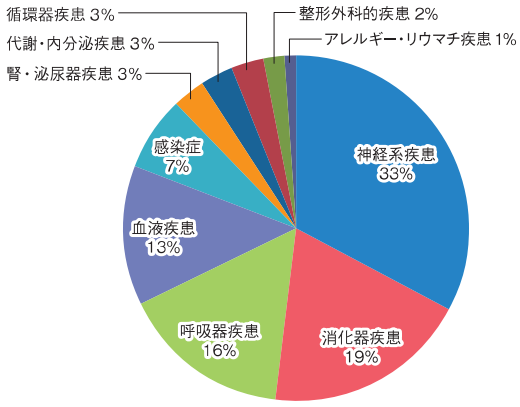
図3：入院患者の原因疾患別割合